＜前回＞アレクサンドリア学派とオリゲネス

（1）アレクサンドリア学派とアレゴリカルな解釈

１．アレクサンドリアにおけるユダヤ教とキリスト教の伝統

ヘレニズムのユダヤ教からヘレニズム・キリスト教へ、都市的精神状況

聖書的宗教とギリシャ哲学の積極的な統合、聖書のアレゴリカルな解釈

→ ギリシャ教父の思索

cf. アンティオキア学派：「歴史的・文献学的研究」「アレゴリカルな解釈に対しては控えめな姿勢」、タルソスのディオドロス、モプスエスティのテオドロス、クリュソストモス

３．アレクサンドリアのフィロン：「ギリシア・ローマ人が追求していた救いへの唯一の道を、まさにユダヤ教の聖書が教えているのだという確信」、「聖書に二通りの解釈をほどこす。第一の解釈の目的は、聖書の文字どおりの意味を明らかにすること」「当時のギリシアの文法学、文献解釈学」、「聖書の中に、その文字どおりの意味の他に、いっそう深遠な意味が隠されていると信じ、アレゴリー的（象徴的・寓話的）解釈によって、聖書からそれを汲みとろうと努めた。」（出村・宮谷、122）

二段階創造論：可知的世界と人間のイデア、可感的世界と身体的な人間

男性のアダムは理性の象徴、女性のエバは感覚の象徴

５．アレゴリカルな解釈は聖書自体にも遡る。

テキストの意味の多重性の問題

恣意的解釈を避ける方法論、どの意味が基本的か。

（2）オリゲネス

・キュンクのオリゲネス評

「学問的神学の模範」(70)、「すでにパウロによって始まっていた異邦人キリスト教的・ヘレニズム的パラダイムが、神学的な完成に至る」(71)、「方法論的に研究する学者」(72)

「ヘレニズムと哲学の力と思考方法がキリスト教に統合された」(85)

「下降と再上昇というプラトン的・グノーシス的な構図」「永遠的イデアと時間的現象の間の一貫した区別」(74)

「キリスト論におけるパラダイム転換」(92)、「神学の関心は、すでに初期ギリシア教父時代に、イスラエル民族とナザレ出身のラビの具体的な救済史から、巨大な救済論的システムへと移行していた」(96)、「オリゲネスにおいては」「関心の中心は」「聖金曜日（と復活祭）からクリスマス（と顕現節）へと、つまりまさに神の子の先在、すべての時間以前の彼の神的な生命へと、移動したのである」(97)。

↓

このキリスト教がローマ帝国の国教へと進展してゆく。キリスト教のヘレニズム世界への受肉としてのクリスマスの上昇。

６．アレクサンドリアのキリスト教学校（カテケーシス学校）

７．キリスト教最初の体系的神学の構築

『諸原理について』（創文社）

８．三一論（神とキリスト、聖霊）

９．自由意志論

・罪と裁き・救済の前提としての自由意志

10．終末論 「アポカタスタシス・パントーン」

11．聖書：テキストと解釈

・『ヘクサプラ』: 聖書テキスト自体の研究、本文と諸訳との比較。
・聖書テキストに即した解釈方法
　人間存在の三重性　→　聖書の意味の三重性：身体的意味（字義的・歴史的意味）、
　　魂的意味（道徳的意味）、霊的意味（神秘的意味）
　　→　それぞれの意味にふさわしい解釈方法
　　霊的意味の発見は、アレゴリカルな解釈による。
・詩編 101.8「朝ごとに、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし／悪を行う者をことごとく、主の都から断ちます。」→文字通りに、「朝ごとに国の悪しき者を滅ぼす」ということではない。「悪しき者」とは「悪を行っている人間」ではなく、「各人の心の中に浮かんでくる邪悪な考えのこと」

（３）カッパドキアの三教父

オリゲネスの神学的伝統の継承、4 世紀の三位一体論争を指導、東方神学の伝統の形成。
・カエサリアのバシレイオス（大バシレイオス）、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス

12．古代キリスト教４―公認・国教会と正統教会

＜迫害から公認・国教化へ＞

66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。　第１次ユダヤ戦争(66-70)
95 頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。　第２次ユダヤ戦争(132-135)
249：デキウス帝の迫害
303：ディオクレティアヌス帝(284-305、四分割統治制)の迫害
313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）
325：ニケア公会議　361：背教者ユリアヌス帝即位。
381：コンスタンティノポリス公会議
392：国教(テオドシウス帝)

（１）正統と異端

１．公認・国教化　→　帝国の秩序維持のために、キリスト教の統一が必要になる。
２．歴史的コンテクスト：国教化→政治宗教・政治神学
　　正統教会―正統教義―正典化
３．国教体制：宗教と政治の相互補完、
　　帝国の統一のための宗教の統一（正統教会の成立）
４．教会会議における決定と争点
　　ニカイヤ公会議(325)　：父と子のホモウーシオス（同本質）
　　カルケドン公会議(451)：キリストの本性を巡って（両性論か単性論か）
　325 ～ 451：アレイオス　→　ネストリウス
　　アタナシウス(～ 373)
５．異端：三位一体論・アレイオス派、キリスト論・ネストリウス派
６．養子説・仮現説・様態説→三位一体論とキリスト論との錯綜した議論・論争
・養子説(Adoptionism)：イエスは単なる人間であったが、神の子として受け入れられた。
　実際は、かなり多様な議論が養子説と呼ばれた。
　　子の神性と父の神性には存在論的な差がある（従属説）
　　・アレイオス：子は時間の内で創造された有限的な被造物
　　まだ子の造られなかった時があった

→ 子の神性の不完全、人間の救済が危うくなる
→アタナシウス：父と子の同本質（homoousia）
初期のユダヤ人キリスト教の流れにおける、エビオン派
デュナミス的モナルキア主義（三一論）

・仮現説（Docetism）：イエスが人間と同じ本質を持つことを否認して、十字架の苦難は仮にそう見えただけのことであるとする。グノーシス主義のキリスト論。

・様態説（Modalism）：３世紀の半ばのサベリウス、サモサタの司教パウロ
一神教的伝統の文脈
神の単一性を強調、父と子と聖霊の連続性を強調
同じ神の三つの様態

（２）正統教義：三位一体論とキリスト論

７．ドグマとは
(1)防御的意図：何であるかよりも、何でないか
(2)実践的意義：救いの確実性をめぐって（キリスト論における救済論的意味）
① 救済論的意図 ② 論理的整合性、という二つの要求

８．三位一体論の前提（ティリッヒ『組織神学』）
1.宗教史－類型論 2.神的生命（生きた神）の経験 3.キリスト論

９．三つのペルソナ（位格）、一つの本質
西：substantia ----- persona
東：ousia -----hypostasis

10．内在的三位一体と経綸的三位一体

11．キリスト論・カルケドン信条：真の神、真の人間、totus homo, totus Deus
二つの性について
まざることなく、かけることなく、
分けられることもできず、離すこともできない
↓
キリスト両性論（The Dogma of the Two Natures in Christ）：父と子と聖霊との同本質性
→ 第二の persona であるキリストの内部における神性と人性の関係について、解釈の幅がある
① キリストの人性を強調（養子説のライン）
シリアのアンティオキア、ネストリウス
マリアはキリストの母であるが、神の母（Theotokos）ではない
② 受肉後、キリストの内で神性と人性とは混合し、人性が神性に吸収される（単性論 Monophysitism：様態説のライン）
シリアのヤコブ派教会、エジプトのコプト教会、エチオピア教会、アルメニア教会など
→ キリストの人性は人間に関わりを持たないことになる

（３）公認・国教化と政治

12．キリスト教の公認と国教化

13．政治的秩序と宗教的秩序の相補性
天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）
↓
政治神学 cf. 近代的な政教分離

14．政治的要請としての「正統―異端」論争

宗教的要因との関連性の問題

多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ

・近代日本におけるキリスト教合同問題

・ポスト・プロテスタント時代のキリスト教

ティリッヒ

15．三位一体論の意義

・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎

・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン）、多様性の保持

（４）国教化の帰結

16．国家神学・政治神学としてのキリスト教神学

「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。

ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：

民衆の神学（神話）

国家の神学（ポリスの国家儀礼）

自然の神学（哲学）

↓

キリスト教による「神学」の変革

キリスト論の意義（芦名定道『自然神学再考』晃洋書房）

17．「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。

↓

政治神学（シュミット）

18．絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。

キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。

パウロの国家論の意義（宮田光雄）

19．アウグスティヌスの「神の国」論

「四世紀終わりから五世紀初めにかけて、キリスト教は、忍耐から確立へと変遷した。伝統的なローマの祭礼は国の支持を失い、皇帝たちは、キリスト教の神をローマの運命の保証人として頼りにしたのだった。ミラーノの司祭、アンブロシウスはローマ皇帝にユダヤの王という聖書のイメージを適用することによってこれに答えた。ヒッポのアウグスティヌスは、キリスト教徒の支配者による戦争の遂行を正当化した地の国と神の国の相互補完の理論を展開した。」（マーカス、162 頁）

↓

このアウグスティヌスの意図とその後の影響史・解釈史との区別、そして関連。

20．現代的問題：キリスト教と公共性

国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。

国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。

↓

下からの公共性、ネットワークとしての公共性

＜参考文献＞

１．小高毅 『古代キリスト教思想家の世界　教父学序説』創文社。

２．ティリッヒ 『キリスト教思想史Ｉ　古代から宗教改革まで』著作集別巻二、白水社。

３．Ｈ・チャドウィク 『初期キリスト教とギリシア思想』日本基督教団出版局。
４．Ｋ．バイシュラーク『キリスト教教義史概説』上下、教文館。
５．マルー 『キリスト教史２・教父時代』講談社、平凡社ライブラリー。
６．ペリカン 『イエス像の二千年』講談社学術文庫。
７.ピーター・ブラウン『古代末期の世界――ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？』刀水書房。
８．ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国――小さなメシア運動が帝国に広がった理由』新教出版社。
９．Ｊ．ヘルジランド、Ｒ．Ｊ．デイリー、Ｊ．Ｐ．バーンズ『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。
10. アウグスティヌス 『神の国』岩波文庫。
11. R.A.マーカス 『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。
12. 宮田光雄 『平和の思想史的研究』創文社。
『平和のハトとリヴァイアサン――聖書的象徴と現代政治－』岩波書店。
『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。
『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店。
12. シュミット 『政治神学』未来社。
13. Ｊ．モルトマン、Ｊ．Ｂ．メッツ 『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。
14. アガンベン『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』以文社。
『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。